



安心1700年暮せるまざびん

Q 認知症高齢者の徘徊問題について、現在の取り組みについてどう捉え、どのように評価しているのか。また今後の対応は。

A 認知症高齢者の徘徊は行方不明となってから時間が経過するほど発見は困難になり、さらに健康状態の悪化が推定されるため、いかに早期に発見し保護できるかが重要な課題であると認識している。今後は地域包括支援センター等との連携強化に加え、積極的な一助らん情報メールへの事前登録を促し、地域で見守る体制づくりに努める。

Q コロナ過のインフルエンザ対策は。

A コロナとインフルエンザとは発熱という症状が似ていてPCR検査の需要が高まるものと危惧している。対策として中央病院の新型コロナウイルス感染症外来を拡充した仮称「地域外来検査センター」を

創設して、10月後半を目途に週2、3日間、午後1時間程度拡充し、従来の5名から10名程度可能にしたい。

Q 白血病患者を救う骨髄ドナーだが、ドナー候補となった場合、7日〜10日程の入院、通院が必要となるため、働き盛りの世代の登録者にとって「仕事は休めない」「仕事を休みにくい」などが、提供を断念する大きな理由の一つとなっている現状である。ドナー候補となった市民に対し、骨髄提供しやすい環境づくりとして骨髄支援ドナー制度を早急に導入していただきたい。

A 市としては白血病など血液疾患の患者さんの助かる命を、一人でも多く助けるため、骨髄ドナーが骨髄提供しやすい環境づくりに取り組むことが必要であると認識している。県が公表した骨髄ドナー助成事業を活用し、新年度の創設だけ早い時期に助成制度を創

設したいと考えている。

Q 中央病院の利用者からWIFI整備の要望がある。現在、民間・公共を含め9000の病院のうち81.1%の医療機関がWIFI導入している。コロナ禍において、また市サービスとしても、入院・外来を含めWIFI環境の整備をして頂きたい。せめて、入院室には完備して頂きたい。

A 一部の個室や共用スペースではWIFI環境を整備しているが、これ以上の整備を進める考えはない。

Q 手話は言語との認識に立ち、普及を促すために手話言語条例の制定をしていただきたい。また、当市は7月から新庁舎となるが、市の窓口で対応する際、手話で挨拶できるくらいの対応が必要ではないかと思う。

A 手話への理解を深め、その普及を図るとともに、聴覚に障害がある人もない人も、お互いを尊重し合う共生社会の実現を目指して、本年度内をめどに、できるだけ早い時期に条例を制定したい。また、7

月からの新庁舎での業務開始を機に、生活福祉課の手話通訳者による、窓口担当職員対象の手話勉強会を開き、接遇の向上に努める。

Q (仮称)市営住宅北園団地・瀬戸山団地整備場がPFI事業で行われるが、具体的な費用対効果、また、高齢者や子ども達がいる世帯に配慮した仕様となっているのか。

A 事業費は5.8%、約2億円の削減が期待できる。エレベーターの設置及び、段差の少ないバリアフリーや手すりの設置及び車いすが通れる廊下の幅の確保。結露対策や、

子どもたちがのびのび学べるまざびん

Q 制服の自由選択制として、中学校女子のスクラッグス導入を検討してほしい。

A 現在、十和田市立中学校9校中、女子用制服としてスカートと合わせてスクラッグスを採用している学校は1校で、現在、女子用スクラッグスの導入について検討している学校は、他8校中2校ある。今後、各校における制服の選択肢が増えるよう情報収集・情報提供を行うっていく。

Q 適応指導教室の利用者が年々増えていると聞いているのか。現場での対応はできているのか。また、将来を見据えた支援についても聞きたい。

ニーズに対応した設備が使える仕様とし、最新の住環境を確保する。

Q 稲生川にかかっている稲生橋について、老朽化して危険なうえに幅員も狭く、三沢方面に右折する車で朝夕交通渋滞がおきている。何か対策を考えているのか。

A 稲生橋は青森県が管理している橋梁で、老朽化のため架け替え計画があると聞いている。今後、橋の架け替え工事と現在工事中の三沢十和田線の完成に合わせ、渋滞対策について対策を講じてくれるよう県に強く働きかけていく。

A 適応指導教室で自学学習を丁寧に進め、毎年二学期からは週に四時間、外部講師による教科指導を行っている。またタブレット端末を活用したデジタル教材を活用した学習も進めている。課題として自宅に引きこもりがちな児童生徒に対する支援として、訪問アドバイザーが家庭と学校、または関係機関とつないだり、学校や適応指導教室に指導・助言を行っている。他機関とも連携して今後の支援方法について役割を確認し、情報も共有しながら、一貫性をもった支援になるよう努めている。

Q 当市の学校図書館と市民図書館事業の現状の取り組み、また子どもたちへ読書への関心を高める取り組みをききたい。

A 学校図書館では第4次十和田市子ども読書活動推進計画に基づいて取り組みを進めている。新聞の配置やタブレット端末を利用した電子版の新聞活用も進めている。子どもたちによる多様な企画や活動の他に、PTAや地域の方から図書ボランティアとして環境整備や読み聞かせなども行われている。

市民図書館では図書資料の除菌・消毒を行うブックシャワー2台、図書資料を入れるブックカート3台を配置した。

読書への関心を高める取り組みとして、読み聞かせやビブリ

オバトル・子ども司書養成講座などの小学生向け行事のほか、学校に対して図書セットの貸し出し事業を行っている。

Q 小・中学校の新たなコロナ感染防止策は。

A 8月に2回の臨時校長会を招集し、感染防止策の徹底を指導したこと。9月中旬の県の緊急対策に準じた対応として、本人はもちろん、同居する家族に風邪の症状がある場合も登校を控えさせること。授業等で長い時間他者と接触する活動は控える事。学校行事は原則中止又は延期すること。部活動についても全ての活動を禁止。また、学校で新型コロナウイルスによる感染が確認された場合の対応について濃厚接触の可能性がある範囲に応じて学級・学年・学校の休養措置とすること。

子育て世代が希望を持っているまざびん

Q 子どもの虫歯の予防として、フッ化物を取り入れても行われ、効果をあげているが、当市にも取り入れるお考えは。

A 子どもの頃からの虫歯予防は、豊かな人生を送るための基礎であり大変重要であると認識している。今回提案された幼児へのフッ化物塗布事業については、来年度からの実施に向けて進めていきたい。

Q 療育が必要とされる児童が増えているが、早期療育に取り組むお考えは。

A 市では、乳幼児健診や5歳児セルフチェックを実施しているが、今後の取り組みとして、3歳児健康審査で保護者へ「4歳の頃の発達」を紙面で渡し、4歳半頃にチェックした紙面を保健センターに返信してもらうなど早期支援につながるよう切れ目のない支援体制を整えていく。

Q 悪天候時や冬期間においても利用できる、遊戯施設、子育て支援センター、一時預り、ファミリーサポートセンターなど、子育て世代のニーズに応じた、全天候型の遊戯施設が当市においても必要だと思

うが、市の見解は。

A 子育て世代のニーズは多岐にわたるが、遊戯施設や一時預り、ファミリーサポートセンターなど、子育て世代のニーズに応じた、全天候型の遊戯施設が当市においても必要だと思

A 市民アンケートにおいても、「子ども・子育てのための施設」が一番多く選択されていた。子どもための取り組みは、人口減少対策の重要な施策として捉えている。整備については、必要性も含め今後、調査・研究していく。なお、市民交流プラザ内の「プレイルーム」や「親子ふれあいスペース」について、子育て世代などの意見を参考に、新しい遊具や絵本の購入。また、利用者の駐車場使用料を無料化することを検討する。

Q 妊産婦支援として、産後の栄養はとても重要であるが核家族においては家事・食事がなかなか手が回らないと

の声がある。そこで見守りも兼ね、食事の配食サービスを実施してほしい。

A 産後は様々な理由により、しっかりとった栄養の管理がなされていないことがあると認識している。今後、先行事例などの情報を収集し調査研究していく。

Q 新婚世帯に対し、結婚に伴う家賃や引っ越しなどの新生活のスタートを支援する「結婚生活支援事業」が少子化対策の国策として行われているが当市においても取り入れる気はないか。

A 本市における出会い、結婚への支援は人口減少対策の一つとして、地域全体で支援できる環境づくりに努めている。結婚に踏み出せない理由の中には結婚資金や結婚後の住居の確保など、経済的な理由によるものも上位に含まれており、結婚に伴う家賃や引っ越し等の新生活のスタートを支援する結婚新生活支援事業については、当市においてもこの事業を活用し、実施に向けて具体的な制度設計を進めていく。

Q 将来を担う若者の支援として、また地方定着や奨学金返済の支援事業を行っていただきたい。

A 現在当市では、若者世代も含めた移住者等への支援を行っており令和3年度から新たに「結婚新生活支援事業」を実施することとしている。移住、定住等により若者が十和田市に住んでいただく取り組みは、人口減少対策として重要な課題であると認識している。「奨学金返済支援事業」のような他自治体の取り組みも含め、今後も調査・研究していく。

